
ふくいミュージアム

1995.3.31

No.27

福井県立博物館



フクイリュウ復元図 山本 匠氏画(P.1参照)

春・夏の特別展

フクイリュウとその仲間たち —手取層群の恐竜—

福井県立博物館では、平成元年度から6年間にわたり恐竜化石の発掘調査や研究を行ってきました。その結果、300点を超す恐竜の骨化石や足跡化石を発掘することができました。その中には、世界の研究者が注目する重要なものもあります。

20年ほど前まで、日本には恐竜がいないと考えられていました。しかしここ10年で状況は一変し、日本にも外国と変わらないくらい、さまざまな恐竜がいたことがわかってきました。これまで恐竜の骨格展示と言えば、外国産のものと決っていたものです。しかし今回の発掘調査の結果、草食恐竜のイグアノドン科の復元が可能となりました。日本から産出した恐竜化石による復元ははじめてです。やっと借り物ではない、自国の恐竜の骨格の展示ができるようになったのです。

北陸一帯に分布する、手取層群と呼ばれる中生代の地層からは、日本の恐竜化石の大半が産出しています。今回の特別展では、発掘調査で見つかった化石を中心に、この手取層群で発見されている恐竜化石を一堂に展示します。またフクイリュウの復元骨格や中国の恐竜化石を展示し、恐竜化石研究の成果をあますところなく紹介します。

さらに、発掘現場の再現ジオラマや恐竜コンピュータ教室、恐竜画展なども開催し、日本の恐竜研究の最先端を楽しみながら学んでいただきたいと思えます。

会 期：Part 1 4月28日(金)～6月25日(日)
Part 2 7月21日(金)～8月31日(木)
Part 3 10月1日(日)～10月17日(火)

観覧料：大人800円 大高生600円 中小生400円
☆団体はそれぞれ2割引となります。

表紙解説 1億2千万年前の北陸地方にはシダヤツツグがおいしげる森がありました。イグアノドンのなかまでであるフクイリュウも、この絵のような森や河川を舞台に生活していたのでしょう。

〈展示コーナーと主な展示資料〉

1. 地球の誕生と脊椎動物の進化

地球の誕生から恐竜の出現までをパネルで解説します。

2. 手取層群の研究史

明治時代からはじまった手取層群の研究を、人物を追って紹介します。

3. 手取層群の恐竜

これまでに発見された手取層群の化石を展示します。

- 1) 石川県の恐竜
- 2) 岐阜県の恐竜
- 3) 富山県の恐竜
- 4) 福井県の恐竜
 - ・モノロフォサウルス
 - ・デイノニクス

4. フクイリュウとその仲間たち

復元されたフクイリュウを中心に、イグアノドン科の恐竜について解説をします。

- ・フクイリュウ
- ・プロバクトロサウルス
- ・イグアノドン

5. 中国の恐竜—日本の恐竜のルーツ—

- ・ベルサウルス
- ・トウジャンゴサウルス
- ・クンミンゴサウルス

6. 恐竜なんでも教室

- ヒサクニヒコの恐竜画展(Part2)
- 恐竜なんでも教室
- 恐竜コンピュータ教室
- 化石クリーニング教室

7. その他

- シンボル展示：フクイリュウ動作ロボット
- 発掘現場再現コーナー
- NHK恐竜スペシャル番組
- 発掘記録番組・フクイリュウ復元記録番組

研究ノート

戦国時代の医家の茶の湯と庭

特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡は、戦国大名朝倉氏が文明3年(1471)から天正元年(1573)までの百余年間、五代にわたって山城と城下町を構え、越前国の首府として栄華をきわめた所です。

一乗谷は福井市街の東南約10kmの越前中央山地西縁部に位置し、周囲の東、南、西には起伏量210~740mの山々が連なる要害堅固の谷間です。これまで城主の館や一族の屋敷、武家屋敷、寺院、職人の家跡、上下の城戸や縦横に計画的に配置された幅広い街路などが発掘され、戦国時代にすでに繁華な城下町が存在したことが明らかにされています。

また往時畿内から百年の間に、延べ数百人の公家や学者、高僧、連歌師、猿楽師、医師などの文化人が来訪、文化の交流が盛んでしたが、発掘される多量の遺物や遺構からも、都に劣らない文化の華が、谷中に絢爛^{けんらん}と咲き誇っていた様子がしのばれます。

医師の家跡 城戸の内中央、当時の一乗谷川西側沿いに走る幅8.5mほどの南北幹道から東西方向にのびる幅7mあまりの幹道を西に50mばかりはいった南側に発掘された屋敷跡が、出土した遺物などから医師の家跡と推定されました。焼けて炭化した紙の塊^{かたまり}は、中国の王好古が、元の定宗元年(1246)の頃、金・元代の医家常用の薬物を選び、それに関する諸家の説をまとめてあらわした医書「湯液本草^{とうえきほんぽう}」の写本の断簡であることが分かりました。また薬を調合する青磁の乳鉢^{にゅうぱち}や薬をすくう匙^{さじ}3点、重さをはかる小さな銅錘^{どうすい}なども出土しています。

敷地の広さは約490㎡で、北側の道路との間には幅80cmほどの土堀跡があり、西側に間口2.4mの薬医門を開いています。朝倉氏遺跡では、薬医門は広さ1500

㎡以上の上級武士の屋敷で多く使われており、屋敷の規模は小さいながらも格の高い家であったことが窺^{うかが}われます。主屋の広さは110㎡で、北側に幅1.2mの縁が、西北隅に幅45cmの縁がとりついています。前者の縁に接して床つきの4畳半大の小座敷を間取りすることもできます。縁と土堀の間は狭長な庭になります。

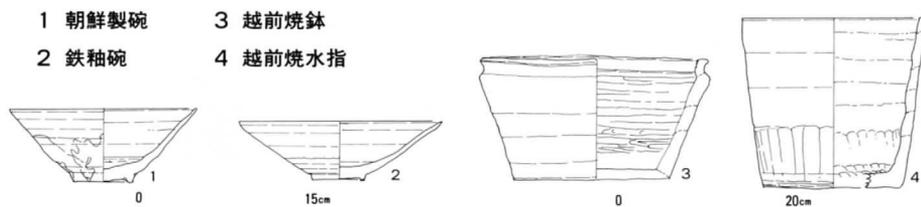
医家の茶の湯 初期の茶の湯は、広間の書院座敷に、優美^{からえ}な唐絵や唐物の道具類を飾りたて、台子^{だいす}や風炉^{ふうろ}をつかって茶をたてる、豪華なものでした。足利義政の時代、わび茶の祖といわれる村田珠光(1422~1502)が現われ、茶道具の簡素化や茶座敷の4畳半など小間への縮小がはかられました。珠光が愛用した茶碗は唐物の青磁茶碗ですが、高級品ではなくひなびた土臭い味わいのものでした。

珠光の茶の湯を引きついだ武野紹鷗^{たけのじょうおう}(1504~1555)は、数寄道具の素材を唐物に限らず、高麗もの・南蛮もの・和ものまで広げ、囲炉裏に工夫をこらし、台子にかえて板を多く用いました。しかし紹鷗は珠光以上に名物道具を所持しており、まだ唐物鑑賞に重きをおいていたことが分かります。座敷を荘厳する道具の数は減少しましたが、名物を拝見することがやはり茶会の主要な目的になっていました。

発掘された医師の屋敷跡の造営年代は、紹鷗の晩年から弟子達が活躍した時代に相当すると考えられます。この地区で発掘された遺物で、座敷飾にふさわしいものとしては、13世紀代につくられた伝世の優品である青白磁梅瓶^{めいびん}、馬蝗絆^{ばこうはん}の故事を思わせる鏡^{かがみ}で補修した跡を残す青磁の下蕪^{しもかぶらはなれ}花入、青磁刻花文盤などがあります。

一方わびの茶にふさわしいものとしては、朝鮮製^{てつゆ}や鉄釉^{てつゆ}の平茶碗、越前焼の水指や鉢があります。紹鷗はうす茶を重視しましたが、茶会記には弘治年間(1555~58)からうす茶に似合う高麗茶碗が多くみら

医家跡出土遺物(『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡』XVII 1986より)



れるようになり、平(高麗)茶碗は永禄10年(1567)頃から多く使われるようになります。東山時代の書院台子式の茶の湯では、水指に唐物の金属製のものをつかっていましたが、紹鷗は釣瓶(木地水指)を好みました。手桶や搦盆(すりばち)の水指は、永禄元年(1558)頃から多く使われていますが、越前焼の水指や鉢はこれらと同列のものといえます。

これらの茶器からは、一乗谷の医師の家でも、当時の堺や奈良の人達と同じような内容の茶の湯を楽しんでいた様子がしのべられます。

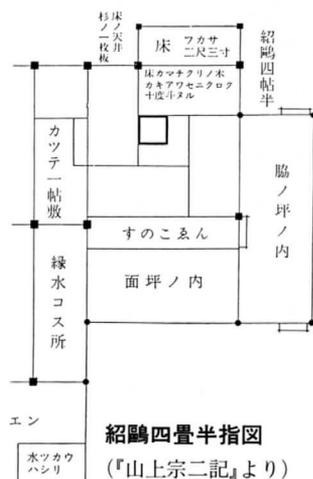
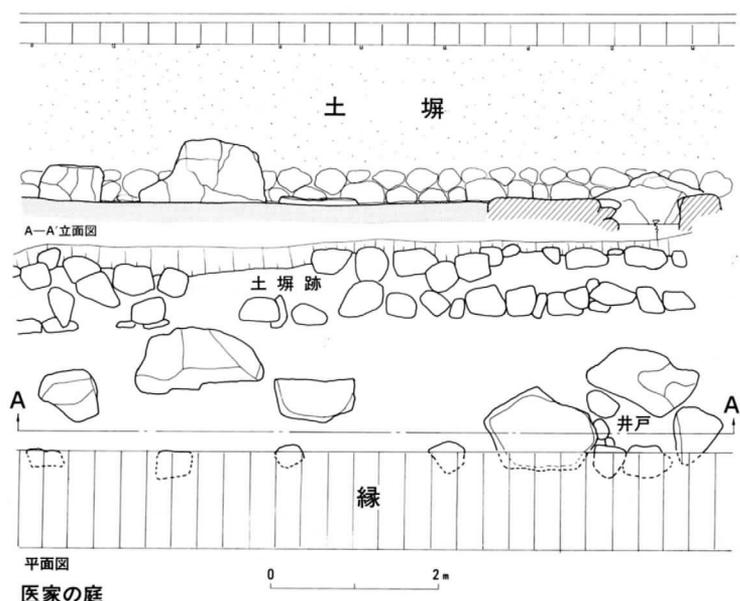
医家の庭 庭といっても奥行1.7m、横幅11mの狭長な枯山水の平庭です。紹鷗の指図にみえる「面坪ノ内」に相当し、この坪ノ内も1.5坪と大変小さいものです。側面に「脇ノ坪ノ内」がありますが、こちらの方に手水鉢が置かれるようになります。面坪ノ内は、縁や座敷からの鑑賞に主眼をおいた書院庭の系譜をひくものでしたが、庭石組や植栽がすくないのが実態でした。当庭には高さ70cmの立石を中心に二石が配されています。伝統的三尊石組の変形といえますが、桃山時代の作庭を伝える『釣雪堂庭図巻』に載っている利休三石に酷似しています。周辺には、明らかに精選されたとみられる径3cm内外の小砂利が化粧敷されています。

清浄を旨とする茶会では、どうしても手水用水鉢が必要で、飛石より先に蹲踞が成立したと考えられ

ます。水鉢は最初は縁側に置かれていましたが、時とともにひきし廂の下、庭と移動してゆきます。庭の東端に浅い小さな井戸がありますが、天端は蹲踞の石組のように組まれています。水鉢は木製であったかも分かりませんが、鉢台石に当たる石は乗せやすいように平らなものです。しゃがむところの前石は長径130cmの大きな上面の平らな石で、縁に接しており、くつぬぎいし沓脱石を兼用していたと考えられます。にじりぐち躰口ができるまでは、縁を介して茶座敷に入入りしていました。

天文11年(1542)の天王寺屋宗達の茶会では、初め床に長盆に小野肩衝・天目茶碗を飾り、手水の間に盆をおろして、船子の画をかけるとあり、すでに中立があったことが分かります。中立の際には、縁を後の露地の腰掛のように使ったことでしょう。

鑑賞用の枯山水の平庭の中に、露地庭の要素を混在しているのが、他にも発掘例がありますが、朝倉氏遺跡の平庭の特徴です。室町時代末期の茶の湯に関連深い庭は、全国的にみても遺存しておらず、茶庭の初源的な遺構として学術的にも大変貴重なものといわねばなりません。(藤原武二)



利休三石図(『釣雪堂庭図巻』より)

入館者の声

平成6年度 館蔵資料展

平成7年2月7日～3月12日に開催した館蔵資料展のアンケートから、いくつかを紹介します。今回はとくに、阪神大震災の直後ということもあって、福井震災のビデオコーナーが人気を集めました。

- ・福井震災時の貴重なフィルムが見れてよかった。(20代・女性)
- ・関西の震災で福井の震災も勉強したく、このビデオを3回も見ました。(30代・男性)
- ・福井震災の話を義母などに聞かされてきましたが、百聞は一見にしかずで、映像で見ることにより被害の大きさを思い知ることができました。(30代・女性)
- ・関西大震災の折とて、一層感深く拝見しました。災害は忘れたころに来るといいますが、この教訓を忘れることのないようにしたいです。ビデオはなつかしく、何度見ましても身のしまる思いをし、今日あるのも多くの方がたのびなみならぬ御苦労のたまものと思います。(60代・女性)
- ・テレビを見て、神戸の地震より福井の方がひどかったんじゃないかな。そのときに生まれてなくてよかったとほっとしました。(小学生・女性)
- ・今まで知らないラベルや地震のすごさを教えてもらいました。(中学生・女性)
- ・引札、チラシ、ラベルなどよくお集めになったと思います。ただ、展示物の量からみてもう少し解説が必要かと思います。(20代・男性)

- ・昔のことがよく分かった。クジラの肉があったなんておどろいた。(小学生・女性)
 - ・なかなかおもしろかったです。カンヅメのラベルや絹織物のシールは福井のものがほとんどないので、なぜなのか、これらは福井とどう関連があるのか示してほしいと思いました。(30代・女性)
 - ・子どものころ、だるま屋の少女歌劇を見に行っていたことがあります、そのころの資料がなつかしかったです。(60代・女性)
 - ・福井のことで、知らなかったものが多くあり、たいへん興味深くみることができました。戦災関連の特別展もぜひ企画してほしい。(30代・男性)
 - ・笏谷石を使った石碑などとても興味深かった。(20代・女性)
 - ・身近な物ばかりで、とても興味深かった。(30代・男性)
 - ・展示の説明の字をもっと大きくしてほしい。(60代・男性)
 - ・順路がややわかりにくい。(40代・男性)
 - ・まとまったコレクションを一堂に展覧し、薄くてもよいからリーフレットのようなものを作ってほしい。(40代・男性)
 - ・続編もお願いしたい。広く県民に資料の提供を呼びかけてください。(40代・男性)
- 皆さまの声は、今後の企画の参考として役立てたいと思います。ご協力ありがとうございました。



ビデオコーナー

ニューフェイス

学芸員 澤 博勝

昨年(1994)の11月1日付で当館の学芸員として赴任しました。兵庫県高砂市で生まれ、大学・大学院・日本学術振興会特別研究員の計14年余りを神戸で過ごし(その間アルバイトや研究の関係で大阪でも暮らしましたが)、妙なご縁で、今まで全く無縁であった福井県に就職することになりました。

私自身はもともと、中・近世の地域社会と宗教との関係のありようをフィルターに歴史を分析するという姿勢で、研究を行ってきました。福井県は中・近世ともにこのような研究対象に恵まれたフィールドであると思っています。

しかしまだ5か月しかたっていませんが、学芸員は自分の研究にだけ埋没してはいられないことを、実感しています。先日終了しました館蔵資料展の準備段階でも(この展覧会は図録=カタログは出さないのでありますがそれでも)、私が考えていたような資料だけではとても展示にたえうるものではないこと、展示そのものの方法論も一朝一夕で拾得できるものではないこと、展示にかかわるパネル以下の諸経費のことも考えねばならない等々、思いもなかったことにたいへん苦勞をしました(ただ現段階で最も大

変なのは毎日定時に出勤しなければならないという、ここ10数年間私の生活リズムになかった日常ですが)。

ただし現在はまだ学芸員としての本当の苦勞は免除してもらっています。今後さらに多くの「予定外の現実」に直面していかなければならないと思っています。しかしそのような中でも、いままでやってきた研究を自分の中で発展させるべく、がんばっていくつもりですので、地域と宗教にかかわることでしたら、古文書以外にも灯籠(金比羅詣や伊勢参宮等々)や道標などの石造物、過去に行われていたり現在も行われている講などのこと、そのほか伝承のようなことでもかまいませんので、ぜひ情報をいただけたらと思います。

もちろん、歴史一般の諸情報もお待ちしています。



友の会会員募集!

平成7年度福井県立博物館友の会会員を募集します。

◆こんな特典があります◆

- ・博物館と友の会の行事をもれなくご案内します。
- ・常設展示を何度でも無料で観覧できます。
(家族会員は1度に4名まで)
- ・特別展の無料入場券が送付されます。
(家族会員は2枚)
- ・共催展は会員特別割引で観覧できます。
- ・県外の博物館や史跡をまわる見学会に参加できます。
- ・友の会の会誌「Myミュージアム」をお届けします。
- ・館の広報誌「ふくいミュージアム」をお届けします。

◆会費(1年分)◆

一般	2,500円
大学生・高校生	2,000円
中学生・小学生	1,000円

家族	5,000円
賛助会員*	(一口) 10,000円

*本会の趣旨に賛同し、上記の会費を納入いただける法人または個人の方

◆期間◆ 平成7年4月1日～平成8年3月31日

◆入会の方法は◆

入会申込書(博物館にあります)にご記入のうえ、会費を次のいずれかの方法で入金してください。

- ・直接、博物館内事務局へ
- ・お近くの郵便局から郵便振替で(申込書は別送)
口座番号 金沢00750-9-23379
加入者名 福井県立博物館友の会
- ・現金書留で郵送(申込書を同封)

◇入会手続き終了後、会員証をお渡しします◇

お知らせください。こんな「天神さま」を探しています。

「まんし天神」と呼ばれていました…

次のような特徴がみられます。ぜひ参考にしてください。

- 紙に描かれている(絹本でない)。
- 目が切れ長に描かれている。
- 上半身だけを描いたものが多い。
- 梅鉢紋の幕(上方)を描いたものが多い。
- 天神が小指を立てたり、伸ばしている場合が多い。

※ なお、詳しくは前号の「ふくいミュージアム」(No.26)を参照ください。



牛上の座天神



白髪の老天神(大首絵)



梅鉢紋入りの幕は、明治期以降のものに多くみられる。(大首絵)

ふくいミュージアム
No.27
1995. 3. 31発行

編集発行 福井県立博物館
福井市大宮2丁目19-15
〒910
☎0776-22-4675(代)
印刷 株式会社 エクシート

